

詩篇 22

- 22 0 指揮者のために。「暁の雌鹿」の調べに合わせて。ダビデの賛歌
- 22 1 わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。遠く離れて私をお救いにならないのですか。私のうめきのことばにも。
- 22 2 わが神。昼、私は呼びます。しかし、あなたはお答えになりません。夜も、私は黙っていられません。
- 22 3 けれども、あなたは聖であられ、イスラエルの賛美を住まいとしておられます。
- 22 4 私たちの先祖は、あなたに信頼しました。彼らは信頼し、あなたは彼らを助け出されました。
- 22 5 彼らはあなたに叫び、彼らは助け出されました。彼らはあなたに信頼し、彼らは恥を見ませんでした。
- 22 6 しかし、私は虫けらです。人間ではありません。人のそしり、民のさげすみです。
- 22 7 私を見る者はみな、私をあざけります。彼らは口をとがらせ、頭を振ります。
- 22 8 「主に身を任せよ。彼が助け出したらよい。彼に救い出させよ。彼のお気に入りなのだから。」
- 22 9 しかし、あなたは私を母の胎から取り出した方。母の乳房に抛り頼ませた方。
- 22 10 生まれる前から、私はあなたに、ゆだねられました。母の胎内にいた時から、あなたは私の神です。
- 22 11 どうか、遠く離れないでください。苦しみが近づいており、助ける者がいないのです。
- 22 12 数多い雄牛が、私を取り囲み、バシヤンの強いものが、私を囲みました。
- 22 13 彼らは私に向かって、その口を開きました。引き裂き、ほえたける獅子のように。
- 22 14 私は、水のように注ぎ出され、私の骨々はみな、はずれました。私の心は、ろうのようになり、私の内で溶けました。
- 22 15 私の力は、土器のかげらのように、かわききり、私の舌は、上あごにくっついていきます。あなたは私を死のちりの上に置かれます。
- 22 16 犬どもが私を取り巻き、悪者どもの群れが、私を取り巻き、私の手足を引き裂きました。
- 22 17 私は、私の骨を、みな数えることができます。彼らは私をながめ、私を見ています。
- 22 18 彼らは私の着物を互いに分け合い、私の一つの着物を、くじ引きにします。
- 22 19 主よ。あなたは、遠く離れないでください。私の力よ、急いで私を助けてください。
- 22 20 私のたましいを、剣から救い出してください。私のいのちを、犬の手から。
- 22 21 私を救ってください。獅子の口から、野牛の角から。あなたは私に答えてくださいます。
- 22 22 私は、御名を私の兄弟たちに語り告げ、会衆の中で、あなたを賛美しましょう。
- 22 23 主を恐れる人々よ。主を賛美せよ。ヤコブのすべてのすえよ。主をあがめよ。イスラエルのすべてのすえよ。主の前におののけ。
- 22 24 まことに、主は悩む者の悩みをさげすむことなく、いとうことなく、御顔を隠されもしなかった。
むしろ、彼が助けを叫び求めたとき、聞いてくださった。
- 22 25 大会衆の中での私の賛美はあなたから出たものです。私は主を恐れる人々の前で私の誓いを果たします。
- 22 26 悩む者は、食べて、満ち足り、主を尋ね求める人々は、主を賛美しましょう。あなたがたの心が、いつまでも生きるように。**
- 22 27 地の果て果てもみな、思い起こし、主に帰って来るでしょう。また、国々の民もみな、あなたの御前で伏し拝みましょう。
- 22 28 まことに、王権は主のもの。主は、国々を統べ治めておられる。
- 22 29 地の裕福な者もみな、食べて、伏し拝み、ちりに下る者もみな、主の御前に、ひれ伏す。おのれのいのちを保つことのできない人も。
- 22 30 子孫たちも主に仕え、主のことが、次の世代に語り告げられよう。
- 22 31 彼らは来て、主のなされた義を、生まれてくる民に告げ知らせよう。

詩篇 22 はメシア詩篇とも呼ばれ、キリストの十字架預言と重なる内容が多く、最も有名な詩篇である。前半は「神よ、神よ、どうして私をお見捨てになったのですか？」で始まる受難の様相が語られ、後半では「私を救ってください」と、賛美へと昇華するストーリー。

詩篇 22:26 – BWV75 第 1 曲の訳

[英語訳]

The poor will eat and be satisfied;
those who seek the Lord will praise him –
may your hearts live forever!

[文語訳]

へりくだる者は喰らいて飽くことを得、エホバを尋ね求む者は
エホバをほめたたえん、願わくはなんじらの心とこしえに生きんことを

[口語訳]

貧しい者は食べて飽くことができ、主を尋ね求める者は
主をほめたたえるでしょう。どうか、あなたがたの心がとこしえに生きるように。

[新改訳]

悩む者たちは、食べて、満ち足り、尋ね求める人々は、
主を賛美しましょう。あなたがたの心が、いつまでも生きるように！

三位一体後第1日曜日のカンタータ

Cantatas for the First Sunday after Trinity

三位一体節後第1日曜日(Trinity 1)はバッハのライプツィヒ時代では特別に重要だった。彼が続けた最初の2年間のカンタータ・サイクルの出発点であり、彼自身が新しいコミュニティに対して音楽的に(BWV75で)自己紹介する機会を得た訳だし、その満1年後には新しいスタイルの方向性を(BWV20で)確立することにもなる。そしてまた、ルター派教会年度の第2半期の始まりという時でもあった。三位一体の季節は信仰や教義という核心の事柄が探求される「教会の時節」であり、それに対して「Temporale」とされる第1半期の待降節から三位一体節の日曜日までは、キリストの誕生、死、復活という生涯に焦点を当てる。現存する Trinity 1 のためのカンタータ3作品はどれも規模は大きく、2部構成で、音楽的にも野心的且つ質の高さを備えたものだ。3作ともその日の福音から金持ちと貧乏人の喩え話をもとに、現世と来世で求める豊かさの問題を、また使徒書簡からは神の愛と兄弟的愛の必要性を導いている。このテーマに対するバッハの処理法は作品それぞれで異なっており、それらを一組にまとめた今回のプログラムは、バッハが思い描いたことをどう作品の中に取り込んだか、その多彩な音楽的レトリックの名人芸的表現によって、見事に把握させてくれる。

ライプツィヒでのバッハの公式の初仕事、BWV75「貧者は喰らいて」は家族と共にライプツィヒに到着して8日後、正式着任の3日前に上演された。整然と書かれた自筆稿とその用紙がライプツィヒのものではないことから、バッハはこの作品をケーテンで既に書き始めていたようだ。このカンタータは14楽章から成り(14はバッハのシンボル数)、うち7楽章では物質的観点での貧富について扱い、あとの7楽章ではそれらがキリスト教の精神に対して挑むという作品だ。

始まりはゆったりとした3拍子のフランス風序曲で、オーボエのソロがヘンデルの合奏協奏曲 Op.3 と同じように修辞学的華やぎを奏でる。合唱が哀感と重い深刻さを添えて「従順なる者は喰らいて満たされよ」(詩篇 22:26)と宣言し、それを4人の合唱ソリスト(Concertisten)が活気あるフーガ「あなたの心は永遠に」の開始で均衡を取り、その語尾はその都度 ewig を長く伸ばし、また leben を生き生きとメリスマする。明らかにバッハはここで彼の作曲手腕を披瀝している。後に続くアリアは最新のフランス風舞曲様式で、テノールのアリア(No.3)はポロネーズ、オーボエ・ダモーレとのソプラノ・アリア(No.5)はメヌエット、アルト・アリア(No.10)は厳かなパスピエ、そして明快なバス・アリア(No.12)はトランペットを伴うジグとなっている。カンタータの前後半はそれぞれバッハが最も愛した讃美歌のひとつ「Was Gott tut, das ist wohlgetan」を、耳当たりの良いリトルネロがフランス的イネガル奏法*を導くのに対峙させた提示で終わる。しかしこれらすべてには単なる見栄えだけに留まらないそれ以上のものがあるのだ。冒頭の合唱でバッハは貧富という明らかな差だけでなく、天国と地上との間でその優劣が逆転するという概念をも強調する。カンタータの第2部で彼は Armut (貧) と Reichtum (富) を精神的次元で対比させ、アルトが「イエスが私の心を豊かにする」と歌うと、バスが人は愛の優しさの中で(”Jesu süße Flammen”) 魂を認識することができるかとそれに応える。

John Eliot Gardiner: From the liner notes of SDG-101

© 2005 Monteverdi Productions Ltd.

*注: 優雅な旋律と躍動するリズムの合成技法